The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜研究ノート＞Speaking of which : 懸垂分詞構文由来の談話標識化について
Author(s)	早瀬, 尚子
Citation	大阪大学英米研究. 2014, 38, p. 59-69
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99382
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

研究ノート

Speaking of which: 懸垂分詞構文由来の談話標識化について*

早瀬　尚子

1. 序

分詞節の主語が主節の主語に一致しないものは「懸垂分詞節」と呼ばれる。このようなタイプの分詞節は、語る際の視点を一致させたいという要求が強い英語では避けられる傾向にある（Declerck 1990など）。しかし、その視点が語り手の視点として一貫している場合には、かなりの例が容認されている（早瀬 2009; Hayase 2011）。また、そのうちMoving onやConsideringなどのいくつかは会話などのジャンルにおいて、話の転換のシグナルであったり、判断の保留であったりと、それぞれに談話標識としての構文化現象を見せている（早瀬 2011；Hayase forthcoming）。

本小論ではこの一連の談話標識化現象が見られる例として、Speaking of whichを取り上げる。コーパス事例のパイロット調査を通じて、この表現が話題転換のシグナルおよび発話や行動の主導権をとるターンテイキング機能

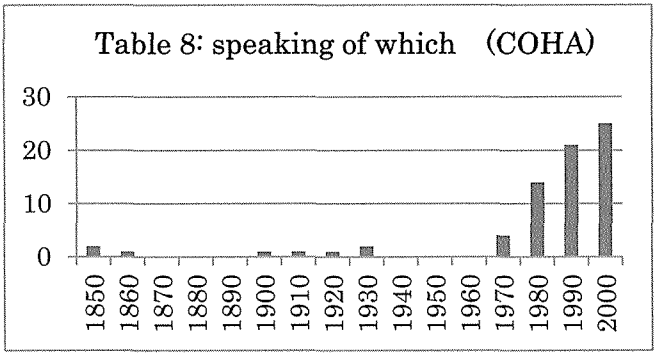
＊私が着任した折り、杉本先生は「ボクが定年になるまで20年近くは早瀬さんが英語学スタッフの一番下やで」と笑っておられました。「若い」先生が定年だなんて、ずいぶん先の話だと思っていたのに、それから月日が流れ、とうとうついにその日が来てしまいました。寂しい限りです。翻訳原稿を見てくださったり、いろんな文献資料を紹介くださったり、私が産休育休の時にゼミを引き受けてくださったり、いつもいつも変わらず気さくにヨコの関係で接してくださったこと、感謝しています。ありがとうございました。新天地でもどうぞお元気で、これからもどうぞよろしくお願いいたします。

を獲得しつつある可能性を示唆する。

2. Speaking of which

2.1 Speaking of whichのコーパス分布

懸垂分詞としては、学習英文法辞典にも載っているSpeaking of NP表現が有名である。しかし、過去200年間のアメリカ英語の推移を観察できるコーパスCOHA（Corpus of Historical American English）によると、近年ではSpeaking of NP表現自体があまり使われなくなっていることがわかる。代わって使用が見られ始めるのがSpeaking of whichであり、1970/80年代以降急激に増加している。



他の類似の表現として、Speaking of {which（221例）/ that（62例）/ this（2例）}が見られる。頻度の観点からも、具体的な表現であるNPを用いるよりも、which/that/thisなどの代名詞系を用いた汎用性の高いイディオムチャンクが生じていることが伺える。

また、使用ジャンルはSPOKENに偏っており、次いで多いFICTIONジャンルからの例もその大部分が会話である。このことは、speaking of whichが聞き手の存在する発話の場に密着した状況で用いられる表現であることを強く示している。

2.2 Speaking of which: 同一話者による話題転換

まず、Speaking of whichにおけるwhichの指示対象を、具体的に特定できる場合とそうでない場合に分けることができる。まず前者の例としては、whichが前出のものごとを指している（1）のケースが挙げられる。

(1) "Harry Potter or not -- he's been there. He's been crushed, and **speaking of which**, he even has a crush in his new film, which opens next week. (…) "

(2) "I'm perfectly serious. They wander down from Canada. **Speaking of which**, where did you wander from?"

(1) では、crushという動詞を用いた直前の発言を受けて、「crushedといえば、来週公開の新しい映画でもcrushしている」と述べて、それに関連する語りを進めている。(2) も同様で、wander from Xという表現形式を受けて、「あなたはどこからさまよってきたのか（Where did you wander from?)」と、話を進めている。

しかしこのようにwhichが指示対象を明確に持っている例は、全体としては多くない。むしろ、大多数の事例が、whichの指示対象が前出の（漠然とした）話題を指しているケースに当てはまる。

(3) "I only eat manufactured meat. **Speaking of which**, I'm rather hungry now."

(4) "Glad to meet you, Lucky. My name's Rutger and you already know Baby. Thanks for helping us out. I promise we won't take advantage of your hospitality past breakfast tomorrow. **Speaking of which,**" He patted his stomach. "it's been a long day. Would it be okay with you if we had a bite to eat now and hit the sack early?"

(3) では前文で「加工肉しか食べない」という自らの食の嗜好を述べ、後の文で「現在お腹がすいている」と述べており、食つながりの連想が行われている。また (4) も、明日の朝食を超えてまでご厚意に甘えようとは思いません、と述べつつ、「朝食」つながりで今何か食べ（て早く寝）てよいか、と尋ねている。いずれも、前出の単語から連想される「食」の話題としては共通しており、その漠然とした話題をwhichで指していると考えられる。

もう一つ注目すべき点として、speaking of which後に導入される話題とのつながりが乏しかったり、whichの指示対象が明確ではなく漠然とした抽象レベルであればあるほど、同時に「話題転換を知らせる機能」の方が前面に押し出されることが挙げられる。次の例を見てみよう。

(5) A: I can't have my wife watch me hauled off in handcuffs again.

B: It's always about you, isn't it?

A: This like running toward a cliff. **Speaking of which**, how's Isabel?

B: I have no idea what you're talking about.

ここでは、「また妻に手錠をかけられる姿を見せるわけにはいかないからね、まるで断崖に向かって走っているみたいだ。」と述べた後に、「ところでイザベルはご機嫌いかが？」と、自分の妻の話題から相手の妻であるIsabelへと話題を大きく転換している。妻というつながりはあるが、あまりに関連性が乏しいための唐突感ゆえか、相手にも「何を言っているのかわからない」と応答されている。ここまでくると、話者の中での語彙的・概念的なつながりの動機づけがあっても、それが聞き手には必ずしも明確ではないし回復可能でもない。このようにつながりがかけ離れていると見なされる場合、speaking of whichにはむしろ、この唐突感を和らげるための「新たなる話題を導入する緩衝表現」としての機能が前面に出てきていると考えられる。つまり「話は変わるけれども」と、つながりが乏しい話題を持ち出すことを相手に知らせる役割が中心になってきているのである。

(6) LIZZIE: Oh, we set a date, well, we didn't set an exact date, we set a time of year.

PHILLIP: Tell me.

BILL: Yeah, we're thinking Autumn.

PHILLIP: Sounds good. Doesn't really matter, just tell me when and where and I'll be there.

BILL: Wait. Is that it? Are you telling me you have no suggestions from the...

LIZZIE: Helpful hints?

BILL: No, nothing, nothing?

PHILLIP: The family getting involved, are they?

BILL: Well, both families, actually. (Cell-phones-ring) **Speaking of which**, it's my little sister.

LIZZIE: Maureen's calling you?

ここではspeaking of whichは、両方の家族がいつ会うかの日取りを決めるというそれまでの話題にあまり関係があるとは言えない「妹からの携帯電話の着信」の情報を導入している。Speaking of whichがなくても発話文としては成立するが、唐突な印象を与える。このため、speaking of whichそれ自体に分析的な意味があるというよりも、無関係な話題を導入する際に挿入される談話標識であると考えられる。

さらに次の事例では、whichの指し示す内容が抽象的でもあるため、そもそも何を指しているのかが、だいぶ後にならないとわからず、そのため話題が完全に変わったように見える。

(7) "Wal-Mart is the ultimate form of democracy — we vote yes each time we buy something," he writes. The problem is, <u>we don't know enough to understand what our vote means</u>. # **Speaking of which**, I've got a decision to make. Am I going to buy my daughter the socks we've finally tracked down: plain white, Fruit of the Loom, $3.76 for five pair? They've got a stick-on label that says "Made in Turkey." # Fishman peels it back. Underneath, it says "Made in the USA." # Is this more evidence of the Wal-Mart effect? There's no way for us to know. (…) Meanwhile, that price seems awfully good... # I toss the socks in the shopping cart. Pretty soon we're heading for the checkout line.

世界有数の巨大資本・大規模経営で知られるアメリカの企業ウォルマート(Wal-Mart)は、その低価格力で顧客を引きつけ地域を発展させる一方、その地域の中小小売業が壊滅すると言われている。この「ウォルマート効果」について執筆した本から「ウォルマートは究極の民主主義の形。我々が何か買うごとにウォルマートにYes票を投じていることになる」ということばを引用した後で、この文の語り手は「問題はその投票の意味を私たちが理解し

ていないことだ」と述べる。そして「そういえば（speaking of which)、私には1つ決めるべきことがあった。娘に5足で$3.76の定評あるブランドの靴下を買うかどうか」と、一見全く関係の無い話を展開させているため、聞き手・読み手にとってはspeaking of whichが全く異なる話題への転換点だと感じられる。実はそのずっと後に、その靴下がどこで製造されたものなのかわからないままに、値段が良いことを理由に靴下を買ってしまうくだりになって、「これもウォルマート効果か？（Is this more evidence of the Wal-Mart effect?)」と述べる文に出会って初めて、whichの指示対象が「Wall-Mart effect（に賛成票を投じる意味を認識していないこと)」であったことが明らかになる。話者はおそらくそのつもりでspeaking of whichを使い、「Wall Mart効果といえば…」と関連する話を持ち出していると思われる。その意味では前文の内容の一部を引き継いで後の文を展開する（2)(3）の拡大版といえるかも知れない。しかし聞き手・読み手の観点からは、そのつながりにはかなり後になるまで確信が持てない。後から文章をしっかり読み返すなどすれば、whichの指し示す内容を復元できるが、オンラインでの発話の場合にはそこまでの深い内省は不可能であろう。つまり、ここでのspeaking of whichは、whichの指し示す内容の復元可能性が薄れており、全体として新たなる話題、新たなるstoryを始める標識としての機能の方が強くなっていると考えられる。[1]

2.3 話者交代後のspeaking of which

これまでの例は、speaking of whichが同一話者の発話内で、それまでの話題を引き継ぐか、転換して新たな話題を提示する状況で用いられていた。これとは違い、話者交代後の発話の冒頭に使われて話題転換を示す例が見られる。

(8) MCCAIN: I'm not trying to ban all political campaign contributions. I'm trying to eliminate the soft money, which has corrupted our legislative process.

SNOW: **Speaking of which**, Jeff Birnbaum is reporting in Fortune Magazine

1 特に、このspeaking of whichがパラグラフ冒頭で使われていることからも、2.3で述べる「新たなる話題を導入する標識」としての機能を強めていると言える。

that the Republican National Committee is about to put together a $30 million issue ad campaign to support Republican candidates, (…) .

マケイン氏が「政治運動の寄付をすべて禁止するのではなく、ソフトマネーを削減しようとしているのだ」と述べているのに対し、スノー氏は「それに関して」と別の宣伝キャンペーン資金の話題を始めている。先ほどspeaking of whichが話題を変えるシグナルとして用いられていたが、話者交代直後に用いられると、その機能に加え、発話の順番取りとしてのターンテイキング機能が出てくる。つまり、話題を転換して新たに自分がその場の主導権を握ろうとする対人関係的なシグナルとして用いられていると考えられる。このタイプの用例はCOCAでは2/103例にとどまるが、COHAでは24/73例（32.87%）、そして自然談話ではないがドラマにおける対話コーパスであるSOAPでも230/608例（37.82%：間投詞が先行する例（e.g., {And/Well/Oh,} speaking of which）を含めると頻度はもっと高くなる）と3～4割の頻度で観察されている。

もう一点興味深いのは、speaking of whichに後続する文が疑問文になっているケースが多々見られることである。COCAではインタビュー番組からのデータが多いため、アンカーやインタビュアーが尋ねる場面が多いことは予想できるが、SOAPでは必ずしもそのような役割が固定化されているとは言えない。にも関わらず、SOAPコーパスでも205/608例（33.71%）が疑問文を後続させている。以下に例を挙げておく。

(9) JANET: At a wedding, no less. I mean, people are going to be taking our pictures. People are gonna be saying how cute we look together. And —

LIBERTY: **Speaking of which**, what are you gonna wear?

結婚式のことを今から考えて、「写真を撮ってくれとみんなが私たちに言うのだろうなぁ」とイメージを膨らませるJanetに対し、Libertyは「(結婚式では)何を着るのか」と話題を転換させている。結婚式の話題そのものからはそれていないのだが、Janetが一人夢見心地な空想に走ってしまっているのに対し、疑問文で現実に引き戻すべく修正を施していることがわかる。疑問文は相手が答えるものなので、一見して話者が主導権を握っていないように感じられ

よう。しかし実は疑問文を用いることで、相手の発話の方向を制限することができるので、その意味では主導権を獲得しているとみなせる。

ただし、疑問文による話題制限は、聞き手によってはずされることもある。

(10) AIDAN: I think you know why I wanted to meet. I'm officially resigning my position in Cambias. It's all in there.

ZACH: Figured as much.

AIDAN: I just don't like things when they get messy.

ZACH: Well, **speaking of which**, are you going to fight for Greenlee?

AIDAN: I don't work for you anymore, Zach.

仕事を辞めたいと申し出ているAidanの話をそらすために、Zachはspeaking of whichを冒頭で使い、Greenlee（会社）のために戦ってくれるのか？と尋ねることで、予想される辞職の話題をわざと外している（残念ながら、このはぐらかしの試みは、後続のAidanの発話からわかるように成功していないが）。

以上は、話題の進め方の主導権を自分のものにする機能を果たしていたが、これとは逆に、話題を続けないことで自分がその場の主導権を握るケースも見られる。

(11) BROOKE: Hey, if you ever get stuck again, you know, you can just lock the door and we can do a little long-distance show.

RIDGE: Unfortunately, I promised the accountants we'd only use this system for business purposes.

BROOKE: Oh. Darn those bean counters. They're always spoiling our fun.

RIDGE: **Speaking of which**, I better go. It's kind of late here.

Speaking of whichの後、Ridgeは「もう行かなくちゃ（I better go）」と言っているが、これは明らかにそれまでの流れとは無関係な発言である。つまり、speaking of whichと言って、何か新しい話題を始める場合だけではなく、それまでの話題を打ち切る、という機能が強く働いているのである。ただし、この例ではその直前の自ら（＝Ridge）の発言を断りの趣旨の発言だとして解釈可能なので、そこにspeaking（of which）がつながる、つまり、「そう（断

りを）言った上で（speaking of which）」私は行かなきゃ」と発言しているとも考えられる。この場合、speaking of which自体が果たす「話題転換」役割は、文脈の前後関係に支えられているため、弱いと感じられるかもしれない。しかし次の例では、speaking of which自体がそれまでの話題を打ち切って新しい行動を促す独立のシグナルとして機能していることがより明らかである。

(12) LILIANA: Oh, yes. We can't wait to meet Kristen and her family. What a happy celebration that's going to be. I bet her parents are every bit as excited about this as we are. (Laughter)

TONY: **Speaking of which**, you know, we should get going, because Kristen's probably at the house by now.

(12) ではKristenの家族の来訪を楽しみにしていると語るLilianaを中断し、もう行った方が良い、とTonyがうながすきっかけをつくる表現として機能している。つまりここでのspeaking of whichは、談話の中での「つながり」を示す働きよりも、純粋に談話を切り上げる働きをしているのである。

3. 日本語の類例

日本語にもspeaking of whichと似た表現が見られる。「そう言えば」「と言うことで」がその例である。

(13) a. 彼は「また見に来ようね」と[言う]ことで、私にさよならを告げていたのだ。

b. 急ぎこの仕事を仕上げねばならない。ということで、明日の予定はどうなっている？

c. ということで、今年もみんな元気に過ごしましょうよ。

(14) a. 彼は「また見に来ようね」と言った。そう[言え]ば私が納得すると思ったのだろう。

b. もうそろそろ今年度も終わりですね。そういえば、卒業式っていつでしたっけ。

c. あ、そういえば、昼間に知らないおじさんが尋ねてきたよ。

「言う」の部分に本来の発話の意味が保持され分析性の高い表現となっている（a）と、「言う」に実質的な発話の意味要素が薄れるかなくなっており、分析性も低く表現全体として談話機能を果たしている（b）のような例がある。この機能は、発話の冒頭で用いられることでさらに強められている。英語の場合も同様で、冒頭で用いられるspeaking of whichは談話上の機能を色濃く反映していると考えられる。

近年歴史変化の分野では、ある種の言語表現が、話者の評価を表す主観性を表すようになり、究極的には対人関係的な間主観性機能をも獲得する場合があることが議論されている（cf. Traugott 2003, 2010, 2011）。特にTraugott (2011) では、文の左端もしくは右端という位置と（間）主観性機能との相関関係を扱っている。本論でのSpeaking of whichはまさに文の左端、つまり発話の冒頭に生じることで、これから談話がどのように進んでいくのかを示す中で対人関係的な機能を発達させている事例と捉えることができる。

4. まとめ

本小論では、懸垂分詞節の談話機能化の例として近年使われるようになってきたspeaking of whichを取り上げて、その談話上の機能について考察を行った。Speaking of whichは1）同一話者が自分の発言を受けて話題を転換させる機能から、2）話者交代直後、発話の冒頭に用いられて、話題を転換させ自分が会話進行の主導権を握る役割を果たす機能、そしてそれが進むと3）話題を打ち切り次の行動に出ることを知らせる機能へと少しずつ役割転換を見せていることを明らかにした。また、この現象が日本語の発話関連表現にも同様に観察されることに触れた。

英語には他にもHaving said that, Talking of…など発話関連の懸垂分詞表現が見られる。これらの事例にもSpeaking of whichと同様、発話の冒頭で対人関係機能を強く担うと思われる例が観察されている（大橋 2013）など）。今後はそれらとの比較対照も行っていきたい。

参考文献

Declerck, Renaart 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*, Kaitakusha, Tokyo.

早瀬尚子 2009.「懸垂分詞構文を動機づける「内」の視点」坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明（編）『「内」と「外」の言語学』開拓社, 55-97.

Hayase, Naoko 2011. "The cognitive motivation for the use of dangling participles in English" In *Motivation in grammar and the lexicon: cognitive, communicative, perceptual and socio-cultural factors*," eds. Radden and Panther, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, 89-106.

早瀬尚子 2011.「懸垂分詞派生表現の意味変化と（間）主観性－considering と moving on を例に－」『言語における時空をめぐって』（大阪大学言語文化研究科）9, 51-60.

早瀬尚子 2012.「英語の懸垂分詞構文とその意味変化」畠中雄二（編）『日英語の構文研究から探る理論言語学の可能性』開拓社, 57-69.

早瀬尚子 2013.「日本語の「懸垂分詞的」接続表現について：「考えてみると」をめぐって」『時空と認知の言語学 II』大阪大学大学院言語文化研究科, 39-48.

Hayase, Naoko. forthcoming "The Motivation for Using English Suspended Dangling Participles: A Usage-Based Development of (Inter) subjectivity," Evie Coussé and Ferdinand von Mengden (eds.) *Usage-Based Approaches to Language Change, a series of Studies in functional and structural linguistics*, John Benjamins.

大橋浩 2013.「Having said thatをめぐる覚え書き」『言語学からの眺望2013』福岡言語学会編, 九州大学出版会, 12-27.

Traugott, Elizabeth C. 2003. "From Subjectification to Intersubjectification," in R. Hickey (ed.), *Motives for Language Change*, Cambridge University Press, 124-139.

Traugott, Elizabeth C. 2010. " (Inter) subjectivity and (inter) subjectification: A reassessment," In Kristin Davidse, Lieven Vandelanotte, Hubert Cuyckens, eds. *Subjectification, Intersubjectification and Grammaticalization*, Mouton de Gruyter. 29-71.

Traugott, Elizabeth C. 2012. "Intersubjectification and clause periphery," *English Text Constructions* 5-1: 7-28.